



Title	地域社会における技能実習生と日本人住民の「対等な関係」の構築過程：恵庭市の市民団体「つなぐ会」を事例に
Author(s)	張, 昕悦; Zhang, Xinyue
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 147, 211-234
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.147.211
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98619
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_1882-1669_147_12.pdf



地域社会における技能実習生と日本人住民の 「対等な関係」の構築過程

—恵庭市の市民団体「つなぐ会」を事例に—

張 昕 悦*

【要旨】本稿は、北海道恵庭市の市民団体「恵庭に暮らす外国人と地域をつなぐ会」の活動を事例に、地域社会における技能実習生と日本人住民の対等関係の構築過程を明らかにするものである。恵庭市に在住している技能実習生に焦点を当て、彼らの労働・生活実態と、地域活動への参加を通じた日本人住民との関係変化を分析した。

分析の結果、両者の関係は三段階のプロセスで変化していることが明らかになった。第一段階では「ホスト-ゲスト」という二元的関係が見られ、第二段階では「活動の共同参加者」としての関係が構築され、第三段階では技能実習生が「発信者」、日本人住民が「見守る側」という対等な関係へと変化した。そこでは、「技能実習生」「日本人住民」という二者にとどまらず個人どうしの複数の関係性の出現が確認できた。

この関係変化を促進した要因として、「つなぐ会」の理念と方法、活動の多様性と継続性、相互理解を深める機会の創出が挙げられる。一方、技能実習生の就労条件や経済的制約、技能実習生グループ内部の緊張関係など、関係構築における課題も浮き彫りとなった。

【キーワード】技能実習生、多文化共生、地域社会参加、市民団体活動

1.問題設定

日本では少子化による労働力不足が深刻化し、外国人労働者への依存が高まっている。技能実習生は2023年10月末時点で41万人を超え、外国人労働者の20.1%を占める重要な存在となった¹。

外国人労働者をめぐる制度は継続的に変化しており、2017年の技能実習法施行、2019年の特定技能創設、2023年の育成就労制度への改定など、多様な受入ルートが整備されてきた。技能実習生は単なる労働力から、日本社会で長期的に一定の役割を果たす継続性を持った労働者へと、その位置づけが変化している。

多文化共生とは、異なる文化的背景を持つ人々が対等な関係を築き、地域社会の構成員として共生することを指す²。しかし、技能実習生は「市場媒介型移住システム」により社会的資

¹ 外国人技能実習機構（2023）『令和4年度外国人技能実習機構業務統計 概要』（参照 2024.7.29）

² 総務省（2006）『多文化共生の推進に関する研究会 報告書—地域における多文化共生の推進に向けて—』

* 北海道大学大学院教育学院修士課程 生涯学習論講座（青年期教育論）修了（2022年度）

本の蓄積が困難で、地域との継続的關係形成が阻害されやすい³。このような理論的枠組みを踏まえ、技能実習生がこのような抑圧的な現状をどのように乗り越えていくかについて検討する必要がある。

先行研究によれば、まず、外国人住民の現状として、定住傾向が強まる中で言語・習慣の相違による地域社会との軋轢、不安定な雇用環境、子どもの教育問題が存在し、藤井（2021）⁴が指摘するように異質性ゆえの地域コミュニティからの排除と社会サービスの不足による深刻な社会的孤立が生じている。政府は「生活者としての外国人に関する総合的対応策」⁵において在留資格を有する全外国人の社会統合を掲げるが、「移民政策ではない」との方針と矛盾し実効性に疑問がある。それに加えて外国人技能実習生は、前述の「市場媒介型移住システム」の中で地域社会での存在感が希薄であること、中小零細企業での就労、都市部から離れた寮での共同生活（中嶋 2022）など、他の外国人住民とは異なる特性を有している。

このように、外国人住民の中でも技能実習生は固有な状況にあり、そのため生活者として直面する課題も他の外国人住民とは異なる特徴を有する。総じて、より複雑性と脆弱性を持っているといえる。したがって、外国人住民が日本社会で生活者として暮らすことがいかに実現可能かを検討する際外国人住民の中で外国人技能実習生に焦点を当てて分析することには意味がある。

近年、外国人技能実習生に関して、経済学、経営学、法学など様々な分野で調査や研究が進み、社会学の領域でも研究成果が蓄積されるようになった。社会学的研究では、まず日本の労働市場における技能実習生の位置付けや彼らの労働現場に焦点を当てた論考がある（恵羅 2018、堀口 2017、上林 2015）。このほか、技能実習生に対する人権侵害や劣悪な労働環境を批判する研究（宮島・鈴木 2014、鈴木 2011）など、外国人技能実習制度が孕む様々な課題を論じたものも見受けられる。

以上のように、技能実習制度に関するさまざまな課題が技能実習生の深刻な社会的孤立を招いている一方で、技能実習生が地域社会とのつながりを持ちにくく、地域社会から遠ざかりがちで、自分のコミュニティーに閉じこもる傾向が強く、日本社会における自分の存在意義も意識しにくくなっているという現状も指摘されている。このような現状は、不可視化された状況と言える。その原因としては、具体的に以下の点が考えられる。

まず技能実習生は法制度上の制約により日本社会において不可視化された状況に置かれている。岩渕（2021）が指摘するように、多文化共生における「生活者・住民」概念は定住を

³ 二階堂（2019）は、技能実習生が血縁や地縁などパーソナルな人間関係を基盤とする「相互扶助型移住システム」ではなく、市場交換原理を土台とする「市場媒介型移住システム」に属していると指摘する。この制度により社会的資本が蓄積されにくく、移民コミュニティ内での継続的な関係形成が妨げられる。その結果、コミュニティの規範を遵守させる制度や成員相互の信頼関係が乏しい状態となり、「解体コミュニティ」がホスト社会において「顔の見えない存在」となりやすい。

⁴ 藤井（2021）により、外国からの流入者によって支えられている日本の経済社会の現状、欧米では「サンクチュアリシティ」として不法移民も含め移民を社会に包摂することを目指す自治体の取り組みがみられることをふまえれば、在留資格や住民基本台帳制度の適用対象、国籍を基準とした人々のみならず、不法滞在者、日本国籍を有し外国にルーツをもつ人々も社会サービスの対象として捉える必要がある。

⁵ 外国人労働者問題関係省庁連絡会議（2006）「生活者としての」外国人に関する総合的対応策
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gaikokujin/honbun2.pdf>（参照 2024.7.29）

前提とするため、最大5年の滞在期間制限を持つ技能実習生は対象から排除されがちである。具体的には転職禁止、失業保険受給の困難、生活保護の対象外、家族帯同禁止等の制約により、地域での社会関係構築や社会参画が限定されている⁶。また、経済的側面では平均給与17万7,800円⁷という低賃金の中で借金返済と母国送金のため儉約を余儀なくされ、Piore (1979)の指摘する社会的志向性の低下が生じている⁸。さらに、都市部から離れた寮生活による物理的距離と、職場と寮の往復という限定的な生活パターン⁹、メディア報道による偏見、日本語能力不足や文化的差異による心理的距離が相まって、地域日本人住民との交流機会が著しく制限され、相互の消極的姿勢が技能実習生の社会的孤立を深刻化させている¹⁰。

こうした状況に対処すべく、現在、技能実習生に向けての取り組みとして主に行政による支援が行われている。行政による支援は、主に三つの側面に集中している。「技能実習生への情報支援」「基本的な生活問題の支援」と「日本語の支援」である（飯牟禮 2019）。外国人技能実習機関（OTIT）の母国語相談窓口開設や国際人材協力機関（JITCO）の専門スタッフ派遣・セミナー開催等が全国的に展開されている。一部の自治体では独自の多文化講座や国際交流サロン等の取り組み¹¹を行っているものの、中嶋（2022）は市民活動の相対的貧困を、酒井（2023）は多文化体験イベントの非日常性・限定性と技能実習生の受け身的「お客様」扱いを批判しており、総じて現行の支援は当座の問題への対処レベルにとどまっているのが現状である。

以上の研究は、技能実習生が社会的に排除される状態をある程度解明し、法律、制度の視点からの考察および、技能実習生と地域社会の関係を検討したものである。しかし、今までの先行研究は、技能実習生と日本人住民の対等な関係がどのようにして構築されるかということ明らかにするには至っていない。対等な関係の構築に向けては、地域社会の生活者と

⁶ こうした状況は変化しつつあるが、本稿執筆時点（2025年6月）での状況として示した」

⁷ 厚生労働省（2022）「令和4年賃金構造基本統計調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2022/dl/08.pdf>（参照 2024.7.29）

⁸ 米国の政治経済学者マイケル・ピオレ（1979）は、母国送金のために自己を犠牲にして働く移民労働者に、人との付き合いといった社会的志向性が低下する傾向があることを指摘する。

⁹ 産業による技能実習生は、異なる職場環境と労働条件に直面している。その中で、特に北海道における農業技能実習生に関しては、これまで多くの研究が行われている。農業の特性上、職場と居住地が市街地から離れているにも関わらず、農家との密接な関係により社会的孤立のリスクが比較的軽減されている。しかし、食品加工業、特に工場でのライン作業に従事する技能実習生は、農業技能実習生とは対照的な状況に直面している。様々な制限があるライン作業の職場環境では、同じ国出身の技能実習生同士であっても交流や繋がりを持つことが困難である。密接な人間関係を築く機会は極めて限られており、職場での孤立感が深刻化している。

¹⁰ 日本人住民は技能実習生の失踪やトラブルに関する報道を通じて、外国人労働者を潜在的に危険な存在として認識する傾向がある。一方、技能実習生は日本人の無関心さを「冷たさ」として受け取り、積極的な交流を避ける傾向を強めている（設楽 2022：64）。

¹¹ 2019年の特定技能新設に伴い全国約100カ所の多文化共生ワンストップセンター整備が打ち出されたが、補助対象は、47都道府県と20の政令指定都市、さらに外国人住民が1万人以上、または5千人以上で全住民に占める割合が2%以上（東京23区は1万人以上で6%以上）の44自治体とした。これでは人口規模が少ない地方、人口減少が進む地域はこの助成の対象とはならない。このような状況で、一部の自治体では、独自の取り組みを行っている。

して技能実習生をとらえる視点が重要であり、そこに向けた取り組みは、多元なセクターの参加が不可欠である。その中でも、地域社会における活動している市民団体は、技能実習生と地域社会との関係を構築する上でも重要なセクターである。市民団体が生活レベルで技能実習生と地域住民と相互の交流の場を築くことへの視点が不可欠だと考える。しかし、技能実習生と日本人住民の関係を焦点化して市民団体の交流活動に着目した調査研究は不足している。

技能実習生という排除されがちな少数集団を社会的に包摂することは、社会教育の領域における固有の課題の一つである¹²。技能実習生と地域社会の共生をいかに実現するかが依然として主要な課題となっている現在、技能実習生が地域社会の一員として、日本人住民とどのように出会い、つながりを形成し、それがどのように変化していったのか、またこのつながりが技能実習生および日本人住民の生活や地域社会においてどのような役割を果たしているのかを明らかにすることには意義があると考ええる。

以上より、本論文は、食品加工業に従事する工場労働者の技能実習生と日本人住民とが接触する場面として地域の社会教育実践に注目し、その活動を通して両者の関係がどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とする。両者が相互にどのようにかわりあっていたかを解明したい。

2.研究方法と調査の概要

本論文は、北海道恵庭市における市民団体の活動に注目し、その事例分析を行う。

恵庭市は札幌市と新千歳空港の中間に位置し、その地理的優位性により食品製造業を中心とした産業が発達している。しかし近年、労働力人口の減少と担い手不足が深刻な課題となっており、恵庭市および周辺地域の外から労働者を受け入れる必要に迫られている。特に技能実習生の数は急激に増加しており、2024年5月末時点で恵庭市総人口70,327人に対し外国人住民登録者数が1,001名に達し、全体の1.42%を占めている。このうち技能実習生は439名で、外国人住民のほぼ半数を占める存在となっている。

恵庭市は2012年から外国人住民の増加に注目し、とりわけ技能実習生の顕著な増加を受けて、彼らを単なる労働力としてではなく共に生活する地域社会の一員として捉えるようになった。2020年に実施した外国人住民の生活に関する調査¹³では、外国人住民が地域イベントへの参加や日本語習得に強い意欲を示しており、地域社会に溶け込みたいという願望を持っていることが明らかになった¹⁴。

¹² 日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育』（東洋館出版社、2006年）

¹³ 恵庭（2020）恵庭に住む外国人の生活についてのアンケート結果 <https://www.city.eniwa.hokkaido.jp/material/files/group/12/gaikokujin-seikatu.pdf>

¹⁴ アンケートの中で：「あなたがより気持ちよく毎日を過ごすために、どんなサポートがあればいいと思いますか？」という質問に対する回答には、以下のような意見が見られた。「もっと日本の友達になってほしいです。」「現在、住んでいる所での祭りに参加したいので、祭りに関する開催情報などをもっと知りたいです。」「精神的と身体的な支援。文化の適応やお祭りなどの地元イベントへの参加などによって。」「うまくコミュニケーションできるように、それからもっと簡単に他の人と出会えるように、日本語と日本文化をもっと学ぶこと。」「異なる文化や祝いを理解するために、恵庭では日本人と他の国籍の人との集まりがもっとあ

恵庭市には活発な市民活動の蓄積があり、「読書と花のまち」としての活動を基盤に市民の主体的な活動が育まれてきた¹⁵。多文化共生に関わる市民団体として、2024年時点で、行政主導の「日本語ひろばえにわ」、日本語能力試験（JLPT）対策を行う「やさしい日本語教室えにわ」、そして「恵庭市に暮らす外国人と地域をつなぐ会」（以下、「つなぐ会」）の3つが活動している。

本論文では、技能実習生と日本人住民との関係構築を目指す「つなぐ会」を対象に据える。

まず、「つなぐ会」の設立経緯、その目的、および得られた成果について確認する。

「つなぐ会」は、2022年10月に、恵庭市「まちづくりチャレンジ協働事業」を活用して住民有志が設立した。主な目的は、外国人住民を一人の「市民」として扱い、恵庭市を外国人住民にとって住みやすい街にすることである。技能実習生は一定期間日本に滞在した後帰国するが、異国での滞在期間中に孤立感を覚え、地元社会とのつながりを求めている。「つなぐ会」は技能実習生が孤独を感じないように支援し、地域の日本人住民とのつながりを築く意欲を後押しするため、様々な活動を企画し続けている。これにより、技能実習生が同じ地域社会の住民として日本人住民との友人関係を築いていくことを目指している。

参加者の状況を見ると、参加者数はイベントの規模により異なり、少ない時は約20人、

多い時は30人から40人程度になる。日本人住民と外国人技能実習生の比率は半々であることが多い。技能実習生の国籍は、マレーシア、フィリピン、ネパールが中心で、職業分野では、農業、食品製造、介護が多い。その中で最も長く日本に滞在しているのは、食品製造業で5年間働いている特定技能実習生である。

活動内容では、従来、国際交流活動として行われてきた文化体験活動がある。工場見学、学校見学、日本語スピーチ発表会の他、着付け、祭り、茶道、書道などの日本文化体験を行ってきた。しかし、「つなぐ会」は技能実習生のアイデアを聞いて活動を組み立て、技能実習生個人の希望を重視するようになった。例えば、「花見に行きたい」という希望に応じて、公園で一緒にピクニックを行うなど、技能実習生たちは活動内容に対し自分の希望を示すようになり、それを受けて「つなぐ会」も活動内容を変化させていった。

また「つなぐ会」は、技能実習生を文化体験活動に誘うだけでなく、他の市民団体が主催する外国人に特定しない手話教室、マラソン大会および高齢者、子ども向けの公益活動、地域社会のフェスなどの活動にも実習生を紹介し、一緒に参加している。さらに、技能実習生はこれらのイベントの運営にボランティアとして参加することもある。こうした活動では、技能実習生は外国人としての身分をことさらに目立たせることなく、日本人住民と同様にその活動自体に興味を持ち、力になりたいという気持ちで参加している。これにより、これまで技能実習生が「支援される側」として扱われていた関係が変化をみせている。

「つなぐ会」が主催する活動はさらに柔軟で、場所や時間の設定も自由である。「つなぐ会」に参加する技能実習生と日本人市民は、私生活での強い結びつきを築いている。例えば、一緒に誕生日を祝ったり、休日にバーベキューを楽しんだり、恵庭市近郊へ旅行に行ったり、日常生活を共有したりする。また、余暇を利用して日本語能力試験を受ける技能実習生に日

ればよいと思います。「自分の理解では、もっと快適に暮らすために大事なものは、尊敬、謙虚さ、親切さ、他人を助けたい気持ちを持って暮らすことです」「平和、愛と尊敬」

¹⁵ 6月10日に恵庭市を訪問し、企画振興部企画課および社会教育課の職員から聞き取った内容。

本語を教えたり、試験会場に送迎したり、応援したりすることもある。

2024年4月から、「つなぐ会」はコミュニティー FMラジオ番組の企画を始めている。一名の技能実習生をパーソナリティとして、「つなぐ会」の主催者はアシスタントとして、毎回異なる技能実習生をラジオのゲストとして招待し、番組を制作し、お互いの日常生活の経験、自らの感想を自由的に話し合う立場をつくっている。

以上、恵庭市の状況と市民団体とその活動の現状を概観した。これを踏まえ、本論文では、その活動に関わっている食品加工業に従事する技能実習生および日本人住民に行ったインタビュー調査を行った。また、「つなぐ会」の活動に参加し、参与観察を行った¹⁶。

表1 インタビュー対象と調査内容：

	市民団体	日本人住民	技能実習生
対象	Aさん（団体代表者）	Bさん（団体活動参加者） Cさん（団体活動参加者）	Eさん Fさん
質問項目	1) 団体規模 2) 活動形式と内容 3) 活動運営の方法 4) 技能実習生の参加状況 5) 日本人住民の参加状況 6) ほかに市民団体と行政との連携状況 7) 今後の活動の展望と具体的な内容について	1) 年齢 2) 職業 3) 技能実習生に対する印象 4) 活動に参加した理由 5) 参加した活動の経験 6) 今後の活動継続の意思 7) これまでの活動の意見、要望 8) 活動の参加を通じて、技能実習生との関係の変化	1) 仕事内容 2) 来日年齢 3) 来日理由 4) 日本の生活の評価と満足度 5) 活動に参加した理由 6) 参加した活動の経験 7) 今後の活動継続の意思 8) これまでの活動の意見、要望 9) 活動の参加を通じて、日本人住民との関係の変化

3.技能実習生の就労・生活実態について：食品加工場の場合

本節では、「つなぐ会」の活動及び関連する地域活動に積極的に参加している二名の食品加工業の技能実習生（EとF）を対象として実施したインタビュー調査から、彼らの就労と生活の実態を概観する。Eはフィリピン出身の30代男性、もう一人Fはベトナム出身の20代女性であるなお、本論文への記載にあたっては、インタビュー協力者に了解をえるとともに、個人情報保護の観点から配慮を加えた。

（1）労働の現状

Eさんは豊富な職歴を持っており、保険会社のマネージャー、船員、英語教師など、多様な職務経験を有している。また、その学力も優秀で、2万人の志願者の中からわずか200人しか合格できない競争率の高い大学専攻を修了している。来日の主な動機は日本文化への愛着であり、好きな国で働きながら収入を得たいという、彼の言葉を借りれば「Two purposes one

¹⁶ 筆者は2023年10月から2024年10月にかけて、二週間に一回の頻度で、恵庭市で開催されている日本語ひろばおよび「つなぐ会」の活動に参加した。

step」を目指していました」。日本での給与（16万円）は確かにフィリピンでの収入（7万円）より高いものの、これは彼の主たる考慮要因ではない。将来の予定について、Eさんは3年の契約期間満了後に帰国し、日本で習得した技術を活かしてパン屋を開業する計画を持っている。

来日前の準備において、Eさんは言語学習により多くの時間を使い、フィリピンで5ヶ月間、その後茨城県で1ヶ月間の日本語学習を行った。もともと日本のアニメを好んで視聴していたため、聴解力の基礎も比較的良好である。現在、恵庭市のパン製造の株式会社で勤務し、主に洋菓子製造の混合工程を担当しており、一回の作業で50キロの小麦粉、55キロの砂糖など、大量の原料を扱う必要があり、労働強度は高い。Fさんと同様、生産ラインでの作業では、ジェスチャーと簡単な指示で意思疎通を図っている。

Fさんは23歳の若い技能実習生で、今回が初めての海外就労経験となる。来日前は、ベトナムのトヨタ工場でハンドルの製造を主に担当しており、職歴は比較的単一である。

来日の動機は主に経済的理由で、日本での給与（通常13-14万円、クリスマスなどの繁忙期には18万円）は、ベトナムでの収入（6万円）と比べて大幅に高い。早期来日を優先したため、比較的短期の言語学習を選択し、送り出し機関での2ヶ月間の日本語研修を受けたが、それ以前にも独学での学習経験があった。

現在、Fさんは恵庭市のパンを製造する株式会社で働いており、主にサンドイッチとスナック製品の生産ラインを担当し、製品の包装、箱詰め、配送準備などの作業を行っている。彼女の仕事は高い機動性を必要とし、人手不足のラインへの随時支援が求められる。彼女の言葉を借りれば、「私の義務は本当に、人が足りない方、いろんなことをやる。ずっと同じではなくて、毎日変わる」。このような業務形態は、複数の工程における操作技能の習得を必要とする。

食品加工企業として、工場は衛生管理に関して極めて厳格な要求を課している。従業員は専用の作業着、マスク、帽子などの着用規定を厳守し、髪の毛を完全に覆う必要がある。ラインでの作業中は会話が禁止されており、必要な意思疎通は簡単なジェスチャーのみで行われる。Fさんの描写によれば、「その時は簡単なジェスチャーで伝えます。例えば、「OK」とか「待って」とか、基本的な合図だけですな」。

将来の計画について、Fさんは日本で7年間働くことを希望している。この経験と習得する見込みの日本語能力は将来のキャリアに有益であり、以前の自動車会社に戻った際により良い待遇を得られる可能性があると考えている。

このようにEさんとFさんは、恵庭市の食品加工の生産ラインで勤務しており、それぞれ作業中の会話は禁止されており、簡単なジェスチャーでのやり取りのみで意思疎通をはかっている。

(2) 生活の現状

現在、Eさんは1人のルームメイトと約18-19平方メートルの部屋で生活している。彼は次のように述べている「It's really inconvenient for two people to get up, take a shower, or eat. Sometimes when you are sleeping, you will be woken up by your roommate who has to go to work」。部屋には冷蔵庫、エアコン、洗濯機などの基本的な生活設備は整っているものの、2人で生活するには非常に手狭である。住居の場所はやや交通に不便で、職場まで自転車で

10分、スーパーまでは徒歩で20分かかる。特に北海道の長い冬季期間中は、悪天候により活動範囲がさらに制限される。また、アパート地域の特性も地域交流に影響を及ぼしている。両者の居住するアパートは約80%の共重者が技能実習生で、日本人居住者が少ない。このことは、地域住民との交流機会を制限する一因となっている。さらに、今年恵庭4月に発生した事件（フィリピン人技能実習生が部屋でパーティーを開き、騒音により上階のベトナム人技能実習生が刃物でフィリピン人技能実習生を負傷させた事件）により、周辺の日本人住民の外国人技能実習生集住アパートに対する印象が悪化し、Eさんはこうした状況に対して困惑を感じている。

日本語学習において、Eさんは極めて高い主体性を発揮しており、すでにJLPTN4に合格し、現在N3級への挑戦を準備している。彼は日本語学習に強い関心を持ち、特にアニメを通じて聴解力を向上させることを好んでいる。彼の言葉を借りれば、「多分、他の人（日本語能力）はbasicのbasic, for me I love so much, 興味がある」とのことである。

社会的ネットワークの構築面では、Eさんは「つなぐ会」の活動に積極的に参加し、地域社会への溶け込みを図っている。彼の言葉によれば「I always go with A. I want to experience everything and A is very supportive」である。インタビュー時にも、多くの人々が通りがかりにEさんに挨拶し、活動の企画に関する事項について話し合う様子が見られた。

仕事と生活のバランスについて、Eさんは明確に個人的な選好を示している。彼は過度の残業を自主的に避け、「残業できない、自分の時間欲しい。半分半分。Balance」と述べている。この均衡を追求する態度は、生活の質を重視する彼の意向を反映している。友人に技能実習生として来日することを勧めるかという質問に対して、Eさんも慎重な態度を示し、「今の経験は私は特別の人、もし相手は特別、紹介します。でも普通は無理、生活は難しい。本当。」と述べている。

生活面において、Fさんは多くの悩みに直面している、その中でも最も顕著なのは居住空間の狭さの問題である。彼女は別のベトナム人女性と約18平方メートルの部屋で共同生活を送っており、その狭さを「棺みたい」と表現している。居住地の位置は比較的便利で、職場まで自転車です5分、スーパーまでは徒歩4分であるが、空間の狭さは生活の質に深刻な影響を及ぼしている。

より問題なのは、住居配分における不公平な現象である。Fさんは次のように述べている。「なんか、三年終わった人が帰ると、一人になる。それはいい。どうしてある人が一人で一部屋できる、（でも、二人で一部屋という私のような人もいる）家賃も同じ、上げてない。」これに対して彼女は「私不満があるけど、でも会社は返事がない。」と話している。

日本語学習に関して、Fさんは積極的な姿勢を見せており、今年12月のN3日本語能力試験に申し込んでいる。しかし、交代制勤務の影響で、日本語教室への参加機会が制限され、主にオンライン講座での自習を行っている。彼女の日常生活は非常に規則的で、彼女の言葉によれば「仕事終わったら帰って料理、お料理。自分で料理を作る。料理を作って食べてね。あー時々家族連絡します。」という生活を送っている。

しかし、交代制勤務、特に夜勤は彼女の生活の質に重大な影響を及ぼしている。Fさんは「今もなんか夜勤ですからね。時間のもっときつい。」と述べている。地域の活動に参加したくても、参加する時間がない。そして、ルームメイトとの生活リズムの違いが問題を引き起こしており、「自分の生活はちょっと難しいと思う。寝るの時えーと食べるの時、お風呂も。」

と語っている。

休日には、文化体験活動に参加することもある。日本人の友人と札幌や小樽を訪れたり、果物狩りなどの活動に参加したりしている。「私も札幌とか小樽とかね、水族館とか。あ、そうそう。果物狩り」。しかし、これらの活動は経済的・時間的な制約を受けており、「旅行あれば私も貧乏だからね。貧乏とあの貧乏らしい時間もないし」と述べている。友人に技能実習生として来日することを勧めるかという質問に対して、Fさんは「不自由」を理由に否定的な回答を示した。就労面では、転職の制限や様々な規則により制約を感じ、生活面では、言語の壁、社交の制限、職場と寮に限定される居場所により、さらなる制限を感じている。これらは彼女の耐性に挑戦を突きつけており、「我慢」という言葉で表現する状況である。彼女は「みんなお金を稼ぐためにここにいて、みんな我慢している。でもしかたない」と述べている。

以上、EさんとFさんの事例分析を通じて、食品製造業に従事する技能実習生の就労・生活実態において共通する特徴が確認できた。就労面においては、労働環境が高度に規範化されており、厳格な衛生管理、服装規定、作業工程などが定められている。また、言語障壁により、作業中のコミュニケーションは主に簡単なジェスチャーに限定されており、これは日本人同僚とのより深い相互理解や技能伝達を制限する要因となっている。生活面では、最も顕著な問題として居住条件の制約が挙げられ、居住空間の狭さ、宿舍配分の不公平性、共同生活による生活リズムの不一致などが確認された。社会への受け入れにおいても複数の課題に直面しており、交代制勤務により地域活動への参加機会が制限され、言語障壁や居住地域の分離（技能実習生の集住）が地域住民との自然な交流を阻害している。彼らの経験は実習生の就労・生活面での普遍的な困難を反映しており、これらの問題は彼らの生活の質に影響を与えるだけでなく、技能実習生の活動参加にも一定程度の制約となっていることが示唆される。

(3)「つなぐ会」の活動への参加を規定する要因

以上のように、EさんとFさんの就労・生活実態の分析から、技能実習生が地域の活動に参加するにあたり、それを左右し、参加の頻度を規定する要因が考察できる。

まず、賃金レベルは参加者の偏りを生む要因の一つである。特に、参加費用が必要な活動において、収入の低い技能実習生はこのような活動への参加をためらう傾向にある。

Fさんへのインタビューでは、活動に参加したいものの、「貧乏とあの貧乏らしい時間もないし。1番問題はお金。」と述べており、賃金・経済レベルが技能実習生の活動参加に影響を与える大きな要因であることがわかる。

また、技能実習生の労働条件の違いは、参加者の偏りを生む別の重要な要因である。この違いは主に以下の二つの側面に表れている。

まず、勤務体制が活動参加に直接的な影響を与えている。食品加工業の工場労働の技能実習生は交代制勤務を必要とすることが多く、この勤務形態が活動への参加可能性に大きく影響している。例えば、Fさんは「今もなんか夜勤ですからね。時間はずっときつい。」と述べている。この勤務体制により、活動に強い関心を持っていても、時間調整が困難な技能実習生もいる。他の参加者のように安定して参加するためには、工場との交代勤務時間の調整や、夜勤後の生活リズムの調整などの努力が必要となる。これらの追加的な努力を継続的に行うことが難しい技能実習生は、活動に1、2回参加した後、徐々に遠ざかっていく傾向にある。

そして技能実習生の残業に対する態度の違いも、参加者の偏りを生む重要な要因となっている。固定の勤務時間以外に、より多くの収入を得るための残業を選ぶか、活動に参加して個人の生活を豊かにするかは現実的な選択となっている。例えば、Eさんは他の技能実習生との違いを明確に示し、「私は他の技能実習生とは違い、残業すると、(賃金) もっとできる。でも残業できない、自分の時間欲しい。半分半分。Balance。」と述べている。一方、Fさんは異なる見解を持ち、残業によって賃金を上げることができ、休憩時間が残業に使われることは気にしないと表明している。

このような労働条件と労働時間の違いは、技能実習生の「つなぐ会」活動への参加可能性に直接的な影響を与えている。そして、これらの違いが最終的に参加者構成の偏りをもたらしている。

個人の選択の違いは、技能実習生の活動参加に影響を与えるもう一つの要因である。「つなぐ会」の活動に頻繁に参加する技能実習生は、これらの活動に参加し、地域住民と積極的に交流することが彼らの将来の発展に有益だと考えている。彼らは日本社会の活動に参加することで視野を広げ、経験を積むことを期待している。Eさんはその典型的な例で、インタビューで「I want to experience everything. I always eager to participate in these activities.」と述べている。Eさんのような技能実習生は、日本での時間を単なる仕事ではなく、活動を体験して、個人の成長における重要な段階として捉えている。また、活動参加を通じて自己のスキルを向上させたいと考える技能実習生も活動に参加するが、より実践的な目的を持っている。例えばFさんは、ベトナムに帰国後に日系企業で働くことを計画しているため、地域活動に参加して日本社会をより良く理解したいと明確に述べている。

しかし、このような参加者でも活動参加と仕事の間の葛藤を抱えている。仕事に専念する技能実習生は日本での時間を一つの就労期間として位置づけ、彼らの最優先目標は職務経験を積むことと家族への送金である。彼らにとって、地域活動への参加は興味深いものの、必要不可欠とは考えていない。このタイプの技能実習生は、活動に参加することがあっても、試してみるという程度の気持ちで、より多くの時間を仕事に費やすことを選択する傾向にある。つまり、技能実習生の間での異なる個人の選択が、技能実習生の活動参加への積極性と継続性に直接的な影響を与え、最終的に参加者構成の偏りをもたらしているということである。

本節では、食品加工業に従事する2名の技能実習生のインタビューの調査を通じて、技能実習生の就労・生活実態及び地域活動への参加を規定する要因について、就労実態の分析から技能実習生の労働条件を明らかにした。一方、生活実態においては、日常生活の閉鎖性、地域社会との交流機会の不足など、共通する課題を確認した。また、活動への参加については、賃金、労働条件、個人選択という3つの要因が複合的に影響を与えていることが明らかになった。具体的には、活動参加に伴う経済的負担、交代制勤務による時間的制約、個人の選択との関連性などが、技能実習生の活動参加を規定する要因となっている。

4. 「つなぐ会」の実践の展開と関係の変化

(1) 三つの時期

本節では、「つなぐ会」の実践展開および日本人住民と技能実習生との関係の変化について

解明する。活動における両者の関係性の変化を三つの時期に区分した。その区分は、

「つなぐ会」が実施した代表的な三つの活動を基軸として捉えたものである。これらの活動は、日本人住民と技能実習生との関係が質的に変容していく過程を表すものとして位置付けられる。

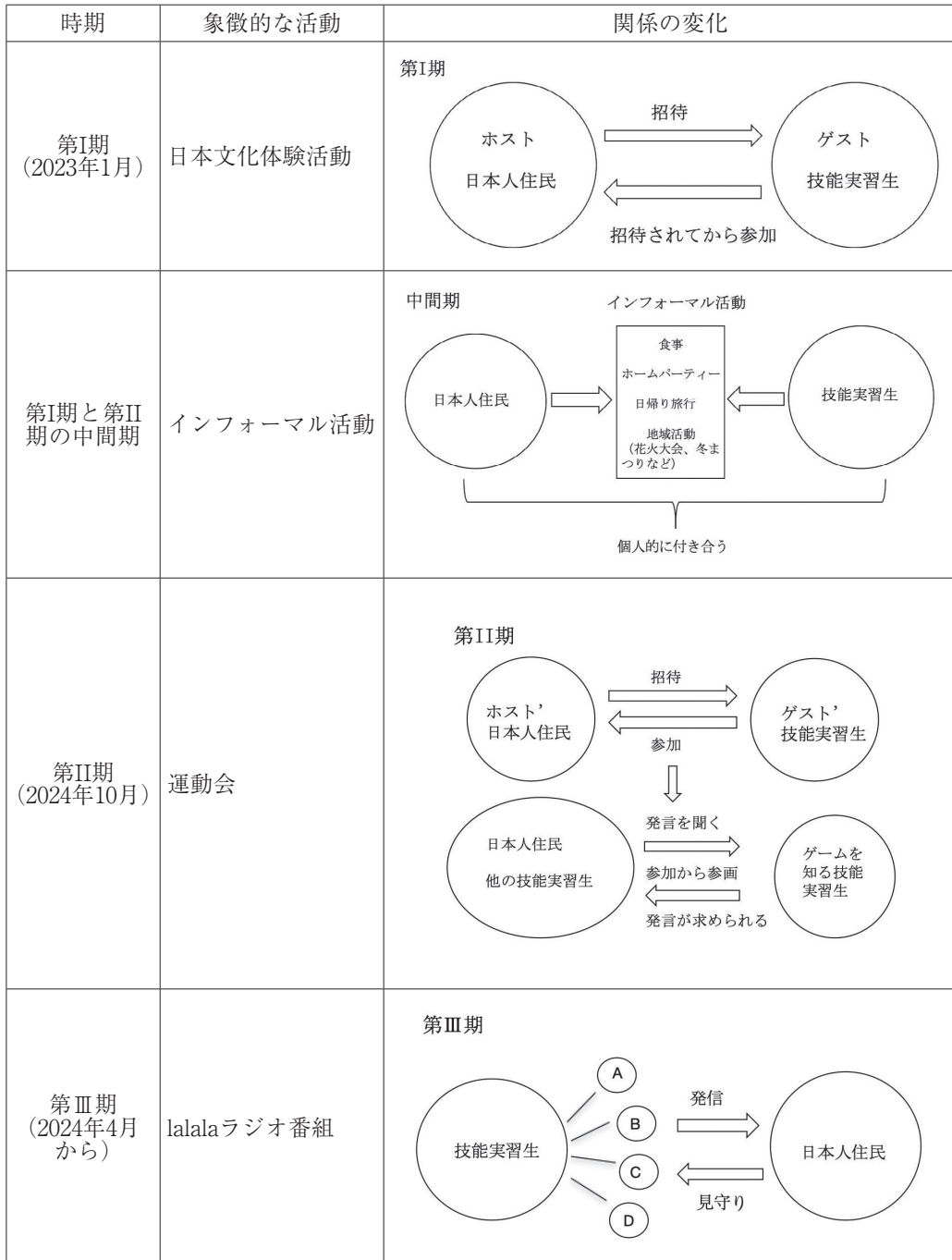


図1 「つなぐ会」の実践の展開と関係の変化

図1に示すように、「つなぐ会」は設立されてから3年に満たない新しい市民団体ではあるが、その実践の軌跡を観察することにより、技能実習生と日本人地域住民との関係において、3つの発展段階が見られる。

(2) 「ホスト」と「ゲスト」としての顔見知り関係：第I期

「つなぐ会」の実践展開および活動における関係の変化において、最初に注目すべきは、設立初期に開催された第一回の日本文化体験活動である。技能実習生が着物の着付けや

「すずらん踊り」などを通じて日本文化を体験する。この活動は、恵庭市で働き暮らす技能実習生の存在を日本人住民に知ってもらい、双方が「顔見知り」となる機会を提供することを目的として行われた。Aさんがインタビューで語ったように、「私の思いは顔見せを作って欲しかったので、活動に参加した外国人の顔をいろんな人が来てくれて見て、ああ、あの時のxxちゃんねとかxxさんねとか」という希望があった。この文化体験活動には、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ネパール出身の4名の技能実習生が参加し、彼らは食品加工業、農業、介護の分野で働いていた。また、20名以上の日本人住民が参加した。

関係の変化

「つなぐ会」の日本文化体験活動は技能実習生に日本人住民との交流機会を提供する一方で、双方の関係も映し出している。まず、技能実習生は日本社会に初めて接する、日本文化の初心者と黙認されて、「教えられる側」に位置づけられる。また、生け花、着物体験、剣玉などの伝統文化の項目の選択自体が、文化的方向性を示している。日本人が文化の伝授者として「ホスト」の立場に立ち、技能実習生は文化の学習者として「ゲスト」の立場に置かれている。実習生たちがアニメなどで見た場面の実体験に感動する様子は、この文化的距離感をより一層際立たせている。

すなわち、活動は確かにつながりの架け橋となっているが、同時にホスト側によって選択された特定の文化の展示と体験の提供を通じて、双方の「ホスト」と「ゲスト」という立場の境界線も強化されている。日本人住民は文化のホストであり活動の主催者として、技能実習生は日本文化を学ぶために招待されるゲストとして位置づけられている。

総じて、文化体験活動は交流と関係構築を促進することを目的としていたが、日本人住民と外国人技能実習生との「ホスト」と「ゲスト」の関係を示している。

(3) インフォーマルな活動から関係の定着：第I期から第II期へ

第一回の日本文化体験活動から一年以上が経過する間に、一部の技能実習生と日本人住民は「つなぐ会」がきっかけで、初期的な交流関係を築いていた。休日の食事会やパーティーの開催、恵庭市の地域活動への共同参加など、インフォーマルな活動を通じて、両者の間に徐々に安定した繋がりが形成されていった。

(4) 同じスタートラインに立つ参加者関係：第II期

「つなぐ会」の主催者Aさんは地域住民の間で外国人住民の増加に対する懸念や不安が広がっていることを認識した。Aさんが述べたように、「普通の生活の中で地域の人たちとか、最近周りに外国人が増えて怖いって、例えばスーパーで固まっているとか道で固まっていた

ら怖いっていう声を聞いたのね。でもその怖いって知らないから怖い」。このように、住民の不安は主に外国人に対する理解不足や直接的な交流の欠如に起因していると受けとめたAさんは、これらの懸念を払拭するために、まず相互理解を深めることが重要だと考えた。そのため、活動においては技能実習生に日本文化を紹介するだけでなく、技能実習生自身の文化を日本人住民に紹介する機会を設けること、そして活動への技能実習生と日本人住民の共同参加が重要と考えるようになっていく。このような日本人住民と技能実習生の関係変化は、2024年10月の運動会において表れた。これは外国人住民と日本人住民向けの第二回目の運動会である。第一回が恵庭市の主催だったのに対し、第二回は「つなぐ会」が企画・運営を担当した。市民活動センターで開催された運動会には、フィリピン、ベトナム、インドネシア、ネパール、中国などの出身者、そして地域の日本人住民を含む約50名が参加し、紅白両組に分かれて外国の伝統的なゲームに挑戦した。司会は、外国人技能実習生が務め、得点係や審判などその他のスタッフは日本人住民が担当した。

関係の変化

第二回目の運動会では、その内容決定において、技能実習生の意見が大きく反映された。「つなぐ会」は外国伝統ゲームを採用するという大きな方向性を決めた後、技能実習生に具体的なゲーム内容について発言を求めた。活動内容は全員で参画し検討した結果であり、技能実習生の発言が積極的に求められた。

同時に、「つなぐ会」が主催した、この運動会では、外国伝統ゲームという独特な媒体を通じて、技能実習生と日本人住民との関係の変化を示した。確かに、全体的に見れば外国人技能実習生は依然として活動に招待される「ゲスト」の立場として参加していたが、活動の企画段階においては、技能実習生が参加し、自分の意見を述べるできるようになった。この関係の変化は、第一期開始時の純粋な「ホストとゲスト」「外国人技能実習生と日本人住民」という関係とは異なる様相を示している。

具体的には、活動現場では、外国伝統ゲームの導入が、従来の立場を覆す契機となった。この空間では、通常「ホスト」の立場にある日本人住民も、技能実習生たちと「同じスタートラインに立つ参加者」となった。この活動に参加したBさんは次のように感想を述べている。「遊び、全然緊張はしないし、気軽に行けるといえるか、行きたいと思えるし。本当に友達と遊びに行くって感覚」。この役割の再定義は、従来の日本人住民から技能実習生への一方的に「支援する」といった関係を打破しただけでなく、より複雑な多方向的な関係を形成した。ゲームを知らない日本人住民、外国人技能実習生が共に学習者として、ゲームのルールに通じた一部の外国人技能実習生と向き合うという新しい関係が生まれた。

(5) 個人として発信者になる技能実習生：第Ⅲ期

第Ⅱ期からさらに進展が見られたのは、第Ⅲ期における技能実習生の個人としての発信である。この時期から、技能実習生たちは単なる「外国人技能実習生」という枠組みを超え、恵庭市で生活する隣人として、日本人住民に向けて自らの声を発信するようになった。この進展のきっかけとなったのは、2024年から始まったラジオ番組である。

地域活動への積極的な参加を通じて、自身の能力と自信を高めていったEさんは、2024年4月からAさんと共に週1回の「つなぐ会」ラジオ番組のパーソナリティを務めるようになって

た。このラジオ番組の開始は、「つなぐ会」の活動が第三段階へと移行したことを示すと同時に、技能実習生と日本人住民との関係における新たな変化を象徴するものとなった。

このラジオ番組は、フィリピン出身で恵庭市の食品加工業に従事する技能実習生Eさんの視点を軸に展開され、彼の案内によって、番組収録に参加する他の外国人技能実習生たちが自身の生活体験を発信し、日本の住民たちと共有する場となっている。注目すべきは、番組内で技能実習生たちが独立した「発信者」として立ち現れていることである。彼らの発言内容は、単なる技能実習生としての立場を超え、独自の思想、感情、経験、生活態度を持つ個人として表現されている。個人の感想を表現し、自身の経験を共有することで、発信者としての固有の主体として、その存在が現れている。番組での対話では、技能実習生に関わる仕事と生活の話題だけでなく、個人の趣味や関心事、故郷の思い出、成長の過程などについても語り、豊かな個人像を示している。

場面一¹⁷：

G：前ね、私、カレー屋さんに行って。その時に注文したものはうんレシット入ったうんだけど、私注文してないから、なんで私払いますか？って聞いた時に、でも私のせいじゃないから払ってくださってって、ちょっと喧嘩して。でも正直、いや、私すごいなんか私ばっかの人じゃないよ。外国人なくても、私バカの人じゃなくて、注文してないよ。¹⁸

このエピソードは、Gさんが実習生としてではなく、日本の地域社会において、自己意識と権利意識を持つ消費者として、自ら声を上げる姿を示している。彼女が「外国人だからではない」と強調したことは、平等な扱いを求める意思の表れである。

場面二

G：実は私BTSのファンです、armyです。好きですよ。BTSのこと大好き。

E：BTSの名前と私の息子の名前が同じです。

G：違います。

A：うん、一番好きなメンバーは誰？

G：私、一番大好きなのはキムソンジンでだから字が違います。

このシーンから見えるのは、技能実習生が仕事上の立場を超えて、一般の若者として持つ趣味や個性的な特徴である。単に働くために来日した外国人というだけではなく、それぞれが独自の興味や個性を持つ個人として、同世代の文化的な話題に自然に溶け込んでいる。

場面三：

F：私は好きな日本語は痩せの大食い。ちょっと、私のことがあの関係があります。う

¹⁷ 以下のGとHは技能実習生の仮名である。

¹⁸ これは食事後、精算する際、注文していなかったものがレシートに含まれており、それを支払う必要はないと喧嘩になったという場面である。

んなんか私たくさん。食べますけど、あの太いならない。

E：そうね。細いもんねそうです。

A：羨ましいでしょう。

E：羨ましい。

E：フィリピンはなんかちょっと違う。食べだからすぐうん太っているああ、お腹空いた食べるそうなんかいつも食べるだってフィリピンはなんか食べる時、うんいっぱい食うん。

えっと最初はまあ、朝ごはん。朝ごはんはと昼ごはん、真中、真中と晩御飯、晩御飯と夜ごはんあとスナックがある。だからふとって

A：だってベトナムあんまり食べないね。私の知っているベトナムの子たちもみんなそう食べないそう

F：ベトナムあんまに食べない。いっぱい食べて、私逆。みんな言ってあなたベトナム人じゃないね

このやり取りを通じて、従来認識されていた技能実習生の単一的な外国人労働者のイメージとは異なる、Fさんのより豊かな個人像を見ることが出来る。Fさんが「痩せの大食い」と自己を描写する場面には、自身の特徴に対する認識とユーモアのある表現が示されている。また、「みんな言ってあなたベトナム人じゃないね」という周囲の反応を語る際には、ベトナム人に対する固定観念を超越し、伝統的なベトナム人とは異なる自身の食習慣を率直に受け入れる姿勢が見られる。この「違い」は彼女にとって悩みではなく、むしろ個性を表現する特徴となっている。このような語りは、彼女が単なる「観察される側」から、自己を積極的に表現し、個人的な特徴を表現できる「発信者」へと変化したことを示している。

場面四：

H：みなさんこんにちは。私、インドネシアから参りましたH、年は23歳です。私の趣味はあの歌を歌っています。はいよろしくお願いします。

A：よろしくお願いします。Hはあの恵庭でもいろんな音楽イベントに参加しているから。Hの歌声は聞いたことある人は多いかもしれないです。

E：そうですね。なんか有名なですね。

この短いHさんの自己紹介の場面、特にAさんの「Hはあの恵庭でもいろんな音楽イベントに参加しているから。Hの歌声は聞いたことある人は多いかもしれないです」という発言から、聴衆の心の中に浮かび上がるHさんの姿は、単なる恵庭で働く技能実習生としてではない。歌うことを愛する一人の個性豊かな若者として表れている。その姿からは、技能実習生という枠を超えた、個人の個性と才能が発信されている。

関係の変化

ラジオ番組に見られる技能実習生と日本人住民の関係は、初期の活動で見られた日本人と技能実習生との間の「ゲスト」と「ホスト」という関係から大きく変化している。技能実習生は単なる招待されたゲストから、ラジオ番組を通じて「発信者」へと変化した、日本人住民は「見

守り」の存在へと転換している。特にEさんの場合、インタビューから彼自身の役割の変化を認識していることが分かる。「I participated in these activities. This year I became a part of the planning and the responsible part」「our opinions are be considered and expressed」という発言からも明らかである。Aさんも述べているように、番組開始当初はEさんが経験不足のために、ある程度はAさんに頼り、Aさんからのヒントが必要であった。しかし、時間の経過とともに特にEさんの習熟度が増し、以後番組の流れをEさんと他の出演する外国人技能実習生に任せるようになった。

また、番組での対話を通じて、彼らは「出身国」や「仕事内容」といった基本的な内容を紹介するだけでなく、積極的に個人の経験を共有し、意見を表明し、豊かな個人的特徴を示している。これは日本人住民の技能実習生に対する先入観を一定程度打ち破ることになった。例えば、Bさんは技能実習生との実際の交流前の印象について「最初はやっぱりなんか外国人って言葉も通じないし。マナーも悪いのかな？大丈夫かなっていうのあった」と語っている。Cさんも「外国人はなんか怖いわって思ってる人もまだやっぱり世の中には結構いるみたいで」と述べている。しかし、ラジオ番組を通じて、Gさんがインドネシア出身の介護技能実習生というだけでなく、BTSの熱心なファンであり、自分の権利のために主張できる個性的な若者であることを知った。Eさんもまた、フィリピン出身の食品加工工場労働者という側面だけでなく、アニメを愛し、家族を大切に的一面を見せ、「YOLO」といった若者言葉を使用することで時代に即した特徴も示している。Fさんは、ベトナム人という固定観念を打ち破り、自分の個性を明確に表現する若者である。Hさんは歌の才能を持ち、地域活動で歌のパフォーマンスを行う活発な若い女性である。

ラジオ番組を通じて、技能実習生は発信者として、個性的、多面的に表現されている。母国文化に自信を持つ母語話者であると同時に日本語学習者でもあり、技能実習生であると同時に「普通の」若者でもあり、異国での生活者でありながら日本文化に対する独自の見解を持つ観察者でもある。彼らの表現方法や自然な会話スタイルからは、単なる外国人労働者としてではなく、異文化間のコンテクストで自己を発信できる個人としての姿が見えてくる。

この関係の変化はBさんのインタビューにも表れており、「もう今は全然わざわざ外国人の友達とかって言わないで、普通に友達みたいな感じ」という認識に至っている。これは単なる呼称の変更ではなく、相手を一人の個人として捉える視点の獲得を意味している。このような関係の変化と個性の表出は、技能実習生の従来のイメージを超え、「発信者」になることには、より豊かで立体的な個人的特徴を表現している。

以上のように、「つなぐ会」は2023年1月からの活動実践において、技能実習生と日本人住民の関係変化は三つの時期を示している。第I期では、日本文化体験を中心とした活動が行われ、「ゲスト-ホスト」という二元的関係が見られた。第II期では、運動会を通じて、この単一の二元的な関係が緩み始め、両者は活動の共同参加者となっていく。その中で、一部の技能実習生がより多くの参加機会と発言機会を得て、技能実習生の発言が求められる場が形成された。第III期では、ラジオ番組の開催により、技能実習生が受動的な「ゲスト」から自分の個性を持つ「発信者」へと変化し、日本人は「見守り」の役割へと転換した。

(6) 個人から見た関係性の展開：Eさんの場合

本項の目的はEさんの事例分析を通じて、地域活動における日本人住民との関係性の展開

プロセスを考察するとともに、技能実習生グループ内部に見られる重層的な関係構造を明らかにすることを目的とする。

EさんのインタビューとEさんの活動参加の軌跡の整理に基づき、Eさんの活動参加と日本人住民との関係構築のプロセスを段階的に区分する。具体的には、関係の質と量の2つの次元から考察を行う。量的側面は文字の大きさによって交流の頻度と深さを表現し、質的側面については、フォーマル/インフォーマル（公的活動参加/私的交流）および関係性の信頼度と安定性という2つの座標軸を設定し、これら2つの次元の組み合わせにより4つの象限を形成してEさんと他者との関係性を位置づける。インフォーマル・フォーマルの区分に特に注目する理由は、技能実習生と日本人住民が参加する活動が多くの場合、インフォーマル・フォーマルという形で現れるためである。図2の位相図による分析方法に基づき、Eさんの活動参加と日本人住民の関係変化のプロセスを3つの段階に分けて示す¹⁹。

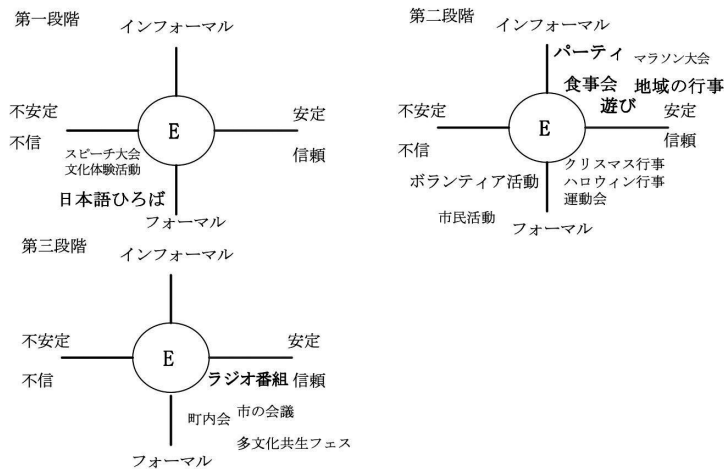


図2 Eさんの活動参加と日本人住民の関係変化のプロセス

第一段階：来日当初の数ヶ月間、Eさんは主にフォーマルな活動を通じて日本社会との接触を開始した。これらの活動には、「つなぐ会」が主催するスピーチ大会や文化体験活動、恵庭市の日本語ひろばなどが含まれる。この段階では、日本人住民との関係はフォーマル活動における一時的な接触に限定されている。来日したばかりの技能実習生として、彼は他の実習生と同様の困難に直面していた。彼の言葉を借りれば、「最初は緊張です。だって、きたばかりです。日本語はわかる。でも話できない。」という状況であった。言語表現能力の制限により、日本人住民との間に明確な距離感が存在し、交流は基本的な自己紹介のレベルに留まっていた：「I can only speak 自己紹介だけ。」

特筆すべきは、日本語ひろばのようなフォーマル活動において、活動環境が過度に形式的であった点である。活動の進行役はスーツを着用した市役所職員であり、活動は固定的で柔軟性に欠けていた。さらに重要な点として、日本人住民と技能実習生の人数比の著しい差異、および固定化された「教える側」と「教えられる側」という役割設定により、対等な交流関係

¹⁹ 本稿における位相図の設計は、宮崎・日置（2010）のETTモデルを参照している。

の構築が困難であった。Eさんによれば、「みんな座って、周り全部日本人。wearing suits. Foreigners were separated and sat at different tables...They kept talking to you. Foreigners felt overwhelmed」。このような環境下では、多くの技能実習生が一度の参加で活動への参加を断念する結果となった²⁰。

第二段階：この段階において、Eさんの活動参加の範囲と種類は拡大し、日本人住民との関係も質的な変化を遂げ、単なる活動の場での接触から、より個人的な交流へと発展した。「つなぐ会」の活動を通じて、Aさん等の日本人住民との初期的な関係を構築し、その関係は徐々により私的な交流へと発展していった。パーティーの開催、花火大会の観覧、地域博物館の見学など、これらの非公式な社交活動を通じて、Eさんと日本人住民との関係は当初の「顔見知り」から、より安定した関係へと段階的に発展した。このような私的な交流環境において、Eはより緊張感が緩和され、公式活動に伴うプレッシャーが軽減され、信頼感が生じていった。

同時に、Eさんは外国人向けに限定されない市民活動にも積極的に参加するようになり、書道教室や地域のボランティア活動などに参加した。これらの活動は彼にとって斬新であり、時として現場唯一の外国人として戸惑いを感じることもあった。しかし、共通文化に関わる活動を通じて、Eと日本人住民との相互作用は双方向性を帯びるようになった。彼は日本文化を一方向的に受容するだけでなく、活動において自身の文化を紹介する立場となった。例えば、クリスマスやハロウィンに関わる活動など、彼が比較的馴染みのある文化行事において、Eさんは明確な安心感と参加への熱意を示した。これらの活動は、自国の文化を紹介しながら、自然に日本文化に触れ、深く理解する理想的なプラットフォームとなった。この双方向の文化交流経験は、彼の参加への積極性と主体性を高めただけでなく、日本人住民とのより深い理解と信頼関係の構築を促進した。

第三段階：この段階において、Eさんと日本人住民との関係も新たな段階に到達した。彼は単なる活動参加者から、活動企画や市の会議への参加、町内会活動の参加、「つなぐ会」ラジオ番組の司会など、活動の企画や意思決定に関与するようになった。継続的な相互作用と交流を通じて、彼は地域住民との間に深い信頼関係を構築した。「if I talk to them often they like to start to open to me, they slowly trusting me and depend on me.」。

この関係の深化は複数の側面で表れている。第一に、Eさんの意見が重視されるようになり、日本人が積極的に彼の意見を求めるようになった。「E, それはどうかな, on foreigners opinion what they think.」。第二に、彼は市政計画などの重要な意思決定にも参画するようになり、「ten years planning how to improve Eniwa」、日本人住民からの高い信頼を示している。最も重要な点として、町内会への参加過程において、Eさんは文化交流における架け橋としての役割を果たすようになった。彼は外国人の視点を提供することで日本人に多文化共生の重要性を認識させるだけでなく、「Eの意見は彼らに異なる視点があることを気付かせて

²⁰ 当初、市役所は、日本人住民と技能実習生の交流の場を提供することを目的で、日本語ひろばを実施したが、技能実習生の不安というこのような事態を認識した後は、技能実習生を事前話題選定プロセスに参加させる試みを導入するようにこの活動も変化していった。しかし、技能実習生の参加が不安定であること（例えば、今回は参加できても次回は仕事の都合で参加できない等）、また技能実習生の日本語能力が話題決定に必要なレベルに達していないことなどから、結果的に固定化された「教える側」と「教えられる側」という構造を打破することはできなかった。

いる」。他の技能実習生の地域活動への参加を積極的に支援し、技能実習生と日本人住民の関係構築における重要な架け橋的存在となった。

Eさんの事例を凝縮して見られるように、継続的な活動参加を通じて、地域社会におけるEさんの立場は明白に変化した。これは象徴的な事例と言えるものの、全ての技能実習生が同様の経過を辿るわけではない。実際のところ、技能実習生間には緊張を伴う関係が存在しており。それらは活動への参加及び地域住民との関係構築に影響をおよぼす要因になっている。

また、「つなぐ会」の活動観察とEさんの事例分析を通じて、技能実習生の参加者間において多層的な関係構造が見られ、その関係性は主に以下の三つの側面に表れていた。

まず、国籍に基づく同質性グループ関係である。活動現場では、技能実習生が国籍に基づいて自然に小グループを形成する傾向が顕著な現象として見られる。このような小グループが一つの群れとなっていくつも存在しているような状況は様々な活動で非常に明確に表れている。具体的には、活動の中で、ベトナム、フィリピン、ネパールなど、それぞれの国籍ごとに独自の交流圏を形成し、その境界線は明確である。この関係は、ある程度は「つなぐ会」が設定した活動の趣旨である「誰でも参加しやすい、話しやすい」という目標と対照をなしている。

次に、異なる国籍グループ間の緊張関係である。2024年4月に恵庭市で発生した外国人事件は典型的な事例である²¹。事件の発端は、同じアパートに住んでいる階下のフィリピン籍技能実習生が開いたパーティーの騒音が階上のベトナム籍技能実習生の迷惑となり、最終的に暴力的な衝突に発展し、2名のフィリピン籍技能実習生が手に怪我を負った。この事件は地域の技能実習生グループに持続的な影響を与え、特に同じ工場内のベトナム籍とフィリピン籍の技能実習生間の関係が非常に敏感になった。この緊張関係は「つなぐ会」の活動にも新たな懸念をもたらし、「つなぐ会」は後続の活動を企画する際、この二つの国の技能実習生間の関係を慎重に考慮せざるを得なくなった。

第三に、日本語能力の差異に基づく階層関係である。活動過程において、簡単な挨拶や日常会話は技能実習生が独自に対応できるが、より深い交流が必要な場合、日本語レベルが最も優れたメンバーを代表として、自分たちを助けてもらうことになる。このように、技能実習生グループ内部に「中心人物」を中心とした関係を形成することになった。Eさんはその典型的な例である。Eさんはインタビューで、他の技能実習生が彼に日本人との交流を依頼すると述べている。「I seemed to be able to communicate with Japanese people on an equal footing, and there was no fear when communicating with them, so I spoke to them naturally. But other Philipppians they don't think that they think my Japanese is bad, they will not communicate properly, and it will turn out to be boring conversation. Since they will ask me can I answer the question. So they will not talk.」他の技能実習より、流暢な日本語能力により、彼は自然と町内会と技能実習生グループを繋ぐ架け橋となった。この言語能力と交流の能力の差異に基づく階層関係において、Eさんのような架け橋型のキーパーソンは、技能実習生参加者グループに日本人住民との交流の便利なチャンネルを提供する一方で、技能実習生

²¹「恵庭で外国人どうしのトラブルか 刃物で切られ2人けが」北海道 NES WEB 4月4日
(<https://www.3nhk.or.jp/sapporo-news/20240404/7000066058.html>)

グループ内部の関係階層化を強化する可能性もある。

では技能実習生のEさんを事例として取り上げ、彼の視点から関係性の展開のプロセスを分析する。ここでは、関係性の質と量という二つの次元から、Eさんの活動参加と関係構築過程を三段階に分けて考察する。初期段階では、主にフォーマル活動を通じて日本人住民との初期接触を確立したが、言語の壁や活動形態の制約により、相互作用は限定的であった。第二段階では、Eさんはより多くの非公式活動に参加するようになり、日本人住民とより私的な交流関係を築いていった。これらの非公式な場面は、Eさんの心理的負担を軽減させただけでなく、より自然なコミュニケーション環境を提供し、日本人住民との信頼関係を深める効果があった。第三段階では、Eさんの役割が質的に変化し、単なる活動参加者から活動の参画者へと発展し、技能実習生グループと日本人住民を結ぶ重要な架け橋となった。さらに本項では、技能実習生同士内部に存在する多層的な関係構造も明らかにした。これには、国籍に基づく同質的なグループ関係、異なる国籍グループ間の緊張関係、そして日本語能力の差異によって形成される階層関係が含まれる。これらの複雑な関係が、技能実習生の関係の変化に影響を及ぼしていることが示された。

5. 結論

以上、食品加工業に従事する技能実習生と日本人住民との関係の変化について、「つなぐ会」の活動を通して分析してきた。本節では、これまでの分析結果を踏まえ、関係の変化の段階的プロセス、その変化に関わる要因、そして関係の変化がもたらした相互作用という三つの観点から考察を加え、結論を示す。

(1) 関係の変化の段階的プロセス

「つなぐ会」の活動を通じた技能実習生と日本人住民の関係の変化は、三段階のプロセスとして捉えることができる。

第一段階は、「ホスト－ゲスト」の関係が特徴的な時期である。日本人住民が「日本文化の伝授者」として「ホスト」の立場に立ち、技能実習生は「日本文化の学習者」として「ゲスト」の立場に置かれていた。この段階での交流は形式的で一方向的であり、双方の間に明確な境界線が存在していた。技能実習生は受動的な立場に置かれ、活動内容の決定にも関与することができなかった。

第二段階では、双方向的な関係への移行が見られるようになった。運動会などの活動を通じて、従来の「ホスト－ゲスト」という固定的な関係が緩み始めた。技能実習生が活動の企画段階から参加し、自らの文化や意見を表現する機会を得るようになったのである。特に運動会では、技能実習生が自国の伝統的なゲームの説明者として活躍し、日本人住民が学ぶ側となるなど、従来の役割が逆転する場面も見られた。この段階での変化は、両者の関係がより対等な「活動の共同参加者」へと変化していく過渡期として捉えることができる。

第三段階では、より対等な関係の構築が実現された。ラジオ番組の制作・放送を通じて、技能実習生は単なる「ゲスト」から「発信者」へと変化した。技能実習生が自身の経験や考えを主体的に発信し、個性的な一人の人間として認識されるようになったのである。これに伴い、日本人住民も「ホスト」から「見守る側」へと立場を変化させ、より対等な関係が構築さ

れていった。この段階では、技能実習生と日本人住民が互いを地域社会の構成員として認め合い、相互理解を深める関係が形成されたと言える。

(2) 関係変化に関わる要因

このような関係の変化を可能にした要因として、まず、「つなぐ会」の活動理念と方法が挙げられる。「顔見知り」から始める段階的なアプローチ、技能実習生を「労働者」としてではなく「生活者」「隣人」として捉える視点、柔軟で非形式的な活動形態の採用、そして技能実習生の主体性を重視した活動設計が、関係の変化を促進する基盤となった。

また、活動の多様性と継続性も重要な要因であった。文化体験から日常的な交流まで、多様な接点が創出され、定期的な活動の実施により持続的な関係構築の機会が提供された。さらに、相互理解を深める機会の創出も、関係の変化を促進する重要な要因となった。

ラジオ番組などを通じた技能実習生の個性的な一面の表現、日常生活での交流を通じた相互理解の深化、そして共同作業や活動を通じた実践的な関係構築により、両者の関係はより深いものへと発展していった。

(3) 関係の変化がもたらした相互作用

技能実習生と日本人住民の関係の変化は、双方に対して重要な影響をもたらした。技能実習生にとっては、自己表現の機会を獲得したことによる主体性の向上、地域社会の一員としての自覚の芽生え、そして日本での生活における孤立感の緩和といった変化が見られた。特に、ラジオ番組での発信者としての経験は、彼らの自己肯定感を高め、より積極的な社会参加を促す契機となった。また、技能実習生同士の関係にも影響をもたらす。活動参加を通じた日本人住民との関係構築および関係の変化の過程において、技能実習生同士の間にも緊張関係が浮き彫りになった。

一方、日本人住民にとっては、技能実習生を個性的な一個人として認識するようになり、「支援する－される」という一方向的な関係から脱却し、多文化共生に対する理解を深めるといった変化が生じた。特に、技能実習生との日常的な交流を通じて、彼らを「外国人労働者」というカテゴリーではなく、一人の生活者として理解するようになっていった。

このように、技能実習生と日本人住民との関係は、当初の「ホスト－ゲスト」という固定的な二元関係から、技能実習生が活動に関わる段階を経て、最終的には技能実習生が独自の視点を持つ「発信者」として、また日本人住民が「見守る側」として相互に認め合う関係へ変化したことが明らかとなった。その一方で、この関係構築の過程においては、技能実習生特有の就労条件や経済的制約、さらには技能実習生グループ内部に潜在する国籍や言語能力の差異に起因する緊張関係など、看過できない課題の存在も浮き彫りとなった。

6.おわりに：今後の課題

本稿では、「つなぐ会」の活動を通して技能実習生と日本人住民の関係の変化を明らかにしてきたが、いくつかの課題も残されている。

第一に、技能実習制度の変革に伴う影響についての検討が必要である。2024年3月15日に技能実習制度の廃止と新制度「育成就労」を新設する出入国管理法などの改正案が閣議決定

された。制度変更により、技能実習生の法的地位や権利、生活環境などが大きく変化する可能性がある。技能実習生と日本人住民との関係構築において、この制度変更がどのような影響をもたらすのか、継続的な研究が必要である。

第二に、関係の変化がもたらす長期的な影響についての研究が必要である。本研究では、一定期間内での関係の変化を分析したが、これらの変化が地域社会にどのような持続的な影響を与えるのか、また技能実習生が帰国後、この経験をどのように活かしているのかなど、より長期的な視点からの研究が求められる。

第三に、多文化共生の新たな課題への対応が必要である。今後より多くの外国人労働者の流入が予想される。技能実習生を含む外国人労働者と地域社会との関係構築はより複雑化することが考えられる。新たな課題に対応するための研究フレームワークの構築が必要である。

このように、本研究を起点として、特に、制度変更や社会状況の変化に応じた研究の深化が必要である。より長期、広範な視点からの研究の展開が課題である。

参考文献

- 浅野慎一 (1997)『日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容—』大学教育出版 45.
- 飯牟禮克年 (2019)「秋田県における外国人技能実習生受け入れへの課題と提言-秋田県とベトナムでの現地調査を踏まえて-」『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』第9号 41-64.
- 岩淵功一 (2021)『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社.池上重弘 (2016)「浜松市と企業-大学-市民による外国人住民受け入れの経緯と課題」『社会政策』8 (1) , 57-68.
- 内田和浩 (1993)「『地域づくりの主体』形成と社会教育実践」『社会教育研究』No.13, 59-80.
- 恵庭市史編さん委員会 (2024)『新恵庭市史 部門史編』恵庭市.
- 恵羅さとみ. (2018)「高齢化する転換期の労働社会と移民労働者—建設分野における日越間の越境的制度構築を事例に—」『労働社会学研究』19, 1-19.
- オルデンバークR (2013)『サードプレイス』忠平美幸訳, みすず書房
(原著『Celebrating the Third Place: Inspiring Stories About the Great Good Places at the Heart of Our Communities』(2002) Da Capo Press.)
- 川村雅則 (2022)「学生たちと学ぶ実習生のリアル」『お隣は外国人 北海道で働く、暮す』北海道新聞社 114.
- 上林千恵子 (2015)『外国人労働者受け入れと日本社会: 技能実習制度の展開とジレンマ』東京大学出版会
- 酒井佑輔 (2023) [住民参加型による外国人技能実習生の地域包摂に関する調査研究- 鹿児島県大崎町を事例に-.]『マツダ財団助成研究報告書』青少年健全育成関係, 35, 20-27. 白崎弘泰 (2022)「技能実習生の日本における生活の実態とその特徴: コミュニティの形成状況からの考察」(博士論文 北海道大学) .
- 鈴木敏正 (1996)「地域住民の主体形成と社会教育学: 山田主体形成論によせて」『北海道大学教育学部紀要』No.71, 21-35.
- 鈴木敏正 (2000)『主体形成の教育学』御茶の水書房
- 田中宏 (2013)『在日外国人 第三版 法の壁,心の溝』岩波新書
- 田村穂 (2020)「技能実習制度の変遷—これまでの課題とこれからの課題—」『神戸大学経済学研究科ワーキングペーパー』2020発行
- 鳥井一平 (2020)『国家と移民 外国人労働者と日本の未来』集英社

- 中嶋裕子 (2022)「コロナ禍における技能実習制度の変換と技能実習生の現状」『福祉健康科学研究』17, 15-23.
- 中園桐代 (2020)「地域の『担い手』として外国人技能実習生を受け入れる人口減少自治体の試み——紋別市国際交流サロンを事例に」『商工金融』70 (2), 43-63.
- 二階堂裕子 (2019)「外国人技能実習生と地域住民の顔の見える関係の構築—岡山県美作市における地域再生の試み—」日本社会分析学会『社会分析』46, 65-81.
- 新田輝夫 (2006)『生涯学習と評価: 住民自治の主体形成を目指して』大学教育出版 バージ・G (2003)『ホワイム・ネイション—ネオ・ナショナリズム批判—』保苅実・塩原
- 良和訳, 平凡社. (原著『White Nation Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society』(2000) Routledge.)
- 藤井えりの (2021)「外国人住民の社会的孤立と地域共生: 地域コミュニティを基盤とした社会サービスの可能性」『岐阜協立大学論集』55巻2号.
- 堀口健治 (2017)『日本の労働市場開放の現況と課題: 農業における外国人技能実習生の重み』筑波書房
- 本間淳子 (2012) 外国人母親によるネットワーク形成の可能性—協同的な活動「料理交流会」を事例として—『異文化間教育』35, 134-147.
- 宮坂宏作 (1992)『生涯学習と主体形成』明石書店
- 宮崎隆志, 日置真世 (2010)「地域生活支援による自己構造の発展論理: 社会的に排除された若者の自立支援との関わりで。」『子ども発達臨床研究』4, 11-20.
- 宮島喬 (2022)『「移民国家」としての日本 共生への展望』岩波新書
- 村田竜樹 (2020)「技能実習生の境界意識の変容と地域の日本語教室に参加することの意味」『言語文化教育研究』18, 142-160.
- 山口壘 (2018)「技能実習生受け入れに対する自治体の支援と「多文化共生」: 埼玉県川口市での取り組み事例から」『移民政策研究= Migration policy review/移民政策学会編集委員会編』10, 95-110.
- 湯山英子, 設楽澄子 (2022)「北海道石狩市の団地と外国人技能実習生-地域住民アンケート結果から。」『開発論集』110, 155-168.
- 渡辺茂 (1979)『恵庭市史』北海道恵庭市役所
- Piore Michael J (1979)『Birds of Passage- Migrant Labor and Industrial Societies-』Cambridge University Press

The Process of Building Equal Relationships Between Technical Intern Trainees and Japanese Residents in Local Communities: A Case Study of the Citizen Group "Tsunagu Kai" in Eniwa City

Xinyue ZHANG

Key Words

technical intern trainees, multicultural coexistence, community participation, citizen group activities

Abstract

This paper aims to clarify the process of building equal relationships between technical intern trainees and Japanese residents in local communities, using the activities of the citizen group "Tsunagu Kai" in Eniwa City, Hokkaido as a case study. The research focuses on technical intern trainees working in the food processing industry, analyzing their working and living conditions, and the changes in their relationships with Japanese residents through participation in community activities.

The results show that the relationship between the two groups changed through a three-stage process. In the first stage, a binary "host-guest" relationship was observed. In the second stage, a relationship as "co-participants in activities" was established. In the third stage, the relationship evolved to one where technical intern trainees became "information disseminators" and Japanese residents took on the role of "supporters."

Factors that facilitated this relationship change include the philosophy and methods of "Tsunagu Kai," the diversity and continuity of activities, and the creation of opportunities to deepen mutual understanding. At the same time, challenges in relationship building were also highlighted, such as the working conditions and economic constraints of technical intern trainees, and tensions within technical intern trainee groups.